

地域医療の現場から



県境を越えた

保健、医療、福祉の連携

在宅で、安心して暮らせる地域に

山都町立国民健康保険蘇陽病院

総看護師長 赤星美鈴



病院の概要

- 許可病床数：57床（一般病棟）
- 入院基本料：10対1
- 1日平均外来患者数：162人
- 1日平均入院患者数：47人
- 病床稼働率：82.6%
- 職員数：65人
（医師6人、看護師37人）

へき地医療の拠点病院として

山都町は、江戸時代中期に始まったと伝えられる大造り物の引き回しで有名な「火伏地藏祭（蘇陽）」や「八朔祭（矢部）」、人形浄瑠璃が楽しめる「清和文楽（清和）」など、伝統ある催しものが今に引き継がれ、特産物のブルーベリーなどが栽培される自然豊かな環境にあります。

当院は、熊本県の東端に位置し、宮崎県に接しています。外来患者の内訳は、山都町が72.7%を占め、次いで宮崎県からが24.3%で、山間県境部のへき地医療拠点病院としての役割を担っています。

現在の病院は築42年が経過して老朽化が激しいため、2013年（平成25年）の新築移転が決定し、動き出しています。新病院に対する期待も大きく、地域包括医療の一員として新たな気持ちで協働しているところです。

地域で適切なケアやサービスが受けられるために

当院に併設する「やすらぎ館」は、平成3年4月に在宅介護支援センターとして開設され、看護相談、介護相談など在宅療養支援の中心的役割を果たしながら、患者、家族を支援してきました。その中でも、サービス提供に関わる機関が月に1回（時間外）集まる「清和蘇陽担当者連絡会議」は、今年で19年目を迎え、保健、医療、福祉の連携の中心であります。

この会議には、開業医、役場健康福祉課職員、保健師、社会福祉協議会や老人保健施設・グループホーム・介護サービス事業所等の関係者、そして当院より、院長、副院長、歯科医師、事務長、管理栄養士、病棟看護師長、外来看護師長、理学療法士長、訪問看護師等、総勢約30名が参加します。



清和蘇陽担当者連絡会議の様子

平成19年の山都町地域包括支援センター設置とともに在宅介護支援センターは廃止となりましたが、「清和蘇陽担当者連絡会議」では、当院の地域連携主任看護師と社会福祉協議会、そして地域包括支援センターが中心となって、年間の講義内容を計画、参加者が講師として講話を行い、資質向上を目的とする研修（ミニレクチャー）が毎回行われています。その後、会議は2部構成で行われ、第1部では関係医療機関からの連絡事項を伝え、各施設の利用状況（空床、待機者）を確認。第2部はケース連絡を行い、病院からの入退院、外来受診者情報や各機関からの情報、質疑、意見交換を行っています。会議が終了した後も、関係機関との情報収集やサービス調整が熱心に行われています。

昨年、対策に追われた新型インフルエンザや、当地区で流行した疥癬においては、情報を早い時期に共有し同じ認識で対応できたことで、感染拡大防止に大いに役立ちました。

県境を越えた地域連携の難しさ

退院支援が重要とされる今、県単位でサービス内容の条件が違うなど、ケアマネジャーやサービス機関担当者とは顔が見えない退院調整に、連携の難しさを感じています。

最近の症例として、今年6月、宮崎県のA町在住の胃癌（末期、未告知）の患者さんの退院前の話し合いが行われた際、「急変したときは、すぐに救急車で来てください」と主治医より説明がありましたが、A町は消防署が無く、A町病院が運転業務を役場に委託して救急車を持つ状況にあります。過去においても、「救急車で患者を迎えに来てほしい」と当院へ連絡があり、当院の救急車で迎えに行き入院となることも多く、当院とA町行政を含めた話し合いが数回にわたり行われましたが、「A町の町民であっても、A町の病院を利用しなければ救急要請には対応しません」と、体制の変化は見られていません。

よって、この患者家族には、「当院の救急車で迎えに行きますので、早めに連絡してください」と伝え、訪問看護師が定期的に訪問し見守っている状況にあります。

患者の視点でとらえる看護を展開していく

高齢者が住み慣れた我が家でできる限り継続して生活が送れるよう、この「清和蘇陽担当者連絡会議」を末永く継続していくことが重要であり、この会議のさらなる充実が地域ネットワーク構築に結びつくと考えます。

さらにA町においては、「いつでも、どこでも救急車が来てくれる」ことが、地域で安心して暮らせる、さらには在宅療養、在宅介護が可能となる要因と考えます。

先日、A町社会福祉協議会と相談した際、「ぜひ担当者連絡会議に参加したい」との返事を受け、大変嬉しく思うとともに、今後は保健師や行政職も参加しながら、救急医療の確保など県を越えてスムーズに図れるよう働きかけをしていきたいと思えます。

さらに、今年検討予定である「熊本県地域医療再生計画（阿蘇編）」の中では、蘇陽作業部会において、「県境における医療連携、救急搬送体制構築」が計画されていますので、今後の動きに期待したいと思えます。

今後も地域特性を活かしながら、「患者側に立ち、誰よりも患者の視点でとらえる看護」を展開し、これからの地域連携体制づくりに貢献できればと思っております。

